

詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 1 号

2012 年 4 月

目次

伊東友乃	あどけない美しさ	1
	鳥男と天気	2
	春に閉じこめられて～萩原朔太郎に～	4
朝倉さやか	春	6
	予感	7
	火影	8
熊谷めぐみ	まったく一片の	10
	ひとひらの勇氣	12
	奴隸劇団	13
	ひとつのできそこない	14
栗山佳織	風との婚姻	16
	八月の底	18
	プール開き	19
高間かさね	目の前にいる	20
	逆さまになる	21
	傷だらけのフラメンコ・浴室にて	22
当津宏昭	絵師フェルメール、筆を片手に	23
	宝石職人の唄	24
	田園にて	25
戸張雅登	朝帰りのシャワー室	26
	グレープフルーツの木	27
	都会の月	28
渡辺信二	手押し車	29
	巫女が嫌いです	30
	禁断の風	31
創刊に際して		32
表紙原画	松窪英二	

あどけない美しさ

伊東友乃

とうとう その風が

金色の 大海原にやつてきたので

穂は うれしさのあまり

いつせいに 揺れだし

せいっぱいに揺れだし

ひかりの魚たちも おどろいて

あちらこちらから とびはじめた

世界は 遠ざかってみればみるほど

懐かしく あたたかい

もう いいかい という声に誘われるけれど

世界が 時おり 見せてくれる

あどけない美しさゆえに

わたしは あっさりと頭を垂れ

まあだだよ と答えるのだ

鳥男と天気

伊東友乃

ええ そうですね

たしかに変なお天気ですね

たぶん それは南東の方角から

鳥男がやってきたせいでしょう

鳥男がやってくると

たいていの女たちは

飛びたい 飛ばされたい と わめき

大嵐をよんで

べろり べろりと

自ら はぎとられにゆきます

魚女までが 水から飛びでて

うろこまで 吹きとばされて

うろこは虹のように

はためき 泡となつてぶくぶく

あられもない魚女がいったい浮かぶわけです

愛してちょうだいよう

愛して 骨までしゃぶってよう だなんて

みんな 下半身から血を流しつづけて

泣くもんだから

空は 大きな吐息を

はあ あ ふ あ ふ はあ はあ と

あつぽったい雲の切れ間に

落つこととして

ええ

そういうわけで

今日みたいなお天気になるのです

春に閉じこめられて

萩原朔太郎に

伊東友乃

― 永遠にふりつづける

白い雨のなかで

あなたは青いろに濡れている いっぱんの樹

根っこちかくのやわらかい部分に

ワラビだのゼンマイだのが豊かに育ち

もうすぐ春がきますよと

ぶむぶむぶむ あなたに囁きかける ―

そうか 春なのか

― あなたは記憶をさぐる ―

この囁きは

まぎれもなく春か

ぶむぶむぶむ ぶむぶむぶむ

膨らんでゆくのが分かるよ

しかし あの酔えた匂いがしない
このように雨がふりつづけていれば
あのかわいた笛の音すら聞けやしない

— あなたの顔はいつそう 青ざめる —

わたしは

もうすでに春のなかにいるのか

春はこんなにも膨らんでしまつて

このようなうす透明の

おおきな卵となつたのか

そして わたしは

おおいなる憂鬱な感情の

白い雨を

この巨大な卵のなかで

いつまでも浴びつづけるのか

— あなたは びしょびしょと泣きつづける

わたしは あなたの詩のぺえじをめくる —

春

朝倉さやか

だれかにささやきかけられた気がして
たちどまると

風が

透明なシーツをはこんできて
わたしにかぶせた

あのとときとおなじ
春の匂い

わたしもうえに
一年前のわたしがかさなつて

わたしはいつたい いつにいいのか

べつの風がシーツをはぎとっていつても
花曇りの残り香が
まわりついて
はなれない

予感

朝倉さやか

わたしのからだの どこかにある湖
久しく涸れていたのですが
どうやら 水がわきだしたようです

ひたひたとしみだす水で 土は泥に変わり
なにかが産みつけていった たまごを抱く

湖はやがて 一面に水をたたえ

たまごのなか
できたてのいのちの かすかな鼓動が
自分を守ろうとする
薄い膜をせつつく

だして わたしをだして

風のない静かな湖
真ん中に
小さなあぶくがあがってきました

火影

朝倉さやか

夏の夜の土手

子どもたちと大人たちに囲まれて

しぶきをあげるドラゴン花火

いくつもの影が躍り狂い

わたしを嗤う

飛び散る火花が　ぬるい風に流される

一粒の火が

昼間刈り取られ　数時間で色あせた

夏草の山へと　落ちていく

夏草は　瞬く間に燃え上がると

巨大な炎となり

わたしを見下ろす

悦びがわたしのからだを満たす

もはや眼前にあるのは

すべてを喰い尽くそうとする炎と

その隙間に見え隠れする夜のみ

とうとうわたしは

言葉を交わしたのだった

わたしの知らない

だがわたしのことをよく知るものと

まったく一片の

熊谷めぐみ

その風に吹かれて悲しみに染まる季節はもう過ぎた
(ここで過去が私を振り返る)

その風に吹かれて苦しむ予感はどう過ぎた
ならばきつと風は 通り過ぎたのだろう

あらぶるところのおくそこに

なにがせまっていたことだろう

かんじようとはなにかもしらずに

ほんろうされていたひびただひび

滂沱の涙を出会うはずのない人に捧げるのだ

互いに交差することのない紙の上に

ありつたけの感情をばらまいて

異なる世界の命が覆いかぶさるようにして出会うのだ

空想と現実

その狭間を行き来できないと誰に言えただろう？

今となればそれは まったく一片の風なのだ
それが連れ去る夢を見たのだ

ひとひらの勇氣

熊谷めぐみ

ひらりひらりと

散る花びらを

この手のひらで受け止めようか

雪の日のよう

降り積もっても

私の手のひらすり抜けてゆく

降りしきる雪に袖を濡らして

若菜を摘んだ高貴な君よ

涙で袖を濡らす私に

勇氣をひとひらお与えください

頬を掠める桃色が

ひらりひらりと散っていく

ただひとひらの花びらが

この手のひらに落ちていく

奴隸劇団

熊谷めぐみ

これからお目にかけますのは 世に珍しき我ら奴隸劇団
自在に変化し表したるは 妖しの演劇 魅惑の舞踏

囚われの我が身も今この時は 自由に羽ばたくことを許されました
お客様方 ご着席を この鳥カゴを模した客席にさあ早く

ジブシーと呼ばれ悪魔と呼ばれ我々の名前は忙しい
それならばせめて奴隸という呼称くらいは

特別に皆様にお貸し致しましょう

人は皆余りにも長い時を 自分で在り続けて飽き飽きしている

今宵は卑俗な我らが自由の翼を持ち

高貴な皆様が囚われの小鳥に

束の間の奴隸気分を味わって頂くことは 金貨にも勝る法外な喜び

アベコベ芝居の醍醐味で 貴方を虜にして見せましょう

神秘を誇るあの月も 今宵は我らにひれ伏すでしょう

太陽に愛され人々に嫌われたこの褐色の肌も

皆様を不思議へと誘う役目を果たすでしょう

舞台が終わるその時に 誰が囚われ誰が自由に羽ばたくか

今宵限りの幕が開きます さあご着席をお客様！

ひとつのできそこない

熊谷めぐみ

ひとつのできそこないが
また別のできそこないを生んで
うんうんと唸っている

ここにひとつのできそこない
瀕死の魂を宿す芸術家ひとり
忘れ去られる恐怖に怯え
深紅のカーテンの下で涙する
想像の泉にすがりつく背には
優しく不要の烙印が刻まれる
碎ける寸前の心を抱え
絶望のほとりに立ち尽くす君は
広い世界の中で魂の孤独に
一番近いできそこない

ここにひとつのできそこない
心を殺すよう命じられた人ひとり
自分を欺くことは死ぬより辛いことを知る

自分を殺すだけでいい
それだけでいい

それだけのことができずに

今日も飽きずに唸りを上げる

後ろ指を指されても

愚者の道を選ぶ君は

広い世界の中で魂の自由に

一番近いできそこない

願い事をどんな琥珀に閉じ込めても

我々は時代が生んだ錯誤者

泥沼に捨て置かれたはみ出し者

完璧に平均を求められるのであれば

生きている限り

すべての者はできそこない

従えば苦しみはなく飲みもまた

挫く力をものともせず

またひとつ

できそこないが増えていく

風との婚姻

栗山佳織

強い風の吹く日

東から老いた羊のような雲が荒野を覆うように流れてくる

風を煽るような大きな樹の向こうから

父の声が聞こえ

繁る葉のざわめきの中からは

死んだ母の声も聞こえてくる

父は父 母は母

あなたは誰

雲が速さを増し

わたしの人生を何度も何度も追い越していく

母が死んだ日を

わたしは数え切れないくらい

繰り返し

その繰り返しの中で

母を殺してきた

あなたはわたしの白濁した目

いつかは父を殺すだろう

どこまでも広がる荒野と

歳月のように重い曇り空の下

容赦のない風と

わたしは婚姻を結ぶ

八月の底

栗山佳織

夫にはしばらく会えないだけ、と彼女は言う
子供たちにもそう言つてある

姑との同居もそのままだし

あの人がいないことを除けば今までと同じ

あれから数ヶ月経つが、彼女の夫はまだ上がつてこない

「顔を見ないと気が済まないような、もう見たくないような、まだ整理がつかない
の」

はにかむと見える大粒の八重歯が静かにひかる

夫婦でよく来た浜辺を歩いてみる

思い出に何か追記しようとして

深い母音が胸につかえる

波は彼女の涙を飲むように夫の元まで退いていく

「手を差し出せば行けるだろうか」

八月の海に手向けた花は、なかなか遠くへ行つてくれない

プール開き

栗山佳織

みんな薄っぺらな体に

白いゼッケンのついた紺色の水着を着て縮こまっている

雨がどうにかこうにか落ちない曇り空の日に

大人たちはプール開きを断行した

キッチンハイターの匂いをする小さなプールに押し込められ

お風呂に入る子も入らない子も漂白される

配慮なんて言葉は学校のプールにはない

身分は半分兵隊なのだ

水圧を無視したシャワーですすがれ

プールサイドで点呼が始まる

六月だというのに冷たい風が吹き

胃腸が弱い子ども達の唇はナメクジみたいにがくがくしている

「よおおい」と笛まで吹いて大人たちが声を張り上げる

戦後はまだ始まっていなかった

目の前にいる

高間かさね

（※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白）

逆さまになる

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

傷だらけのフラメンコ・浴室にて

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

絵師フェルメール、筆を片手に

当津宏昭

暗く冷え切ったアトリエで
お前はこちらを振り返る
蠟燭の火の目を頼りにし
その輪郭が浮かび上がる

灰色の目

赤い唇

青いターバンに

仄かな灯りが溶けてゆく

通り抜ける隙間風

灯火は潰え

全ては色を失くす

暗く冷え切ったアトリエで
耳飾りが揺れる音だけ
残されている

寶石職人の唄

当津宏昭

切って削って光らせて
レンズ豆ほどの石ころに
ひたすら願いを込めている

これを差し出すその人が
胸の底から紡ぎだす
甘美な愛の言葉だけ
考えていればすむように

これを受け取るその人が
採掘場で使われた
子どもの涙や悲鳴など
思い出さずにすむように

切って削って光らせて
研いで磨いて輝かせ
嫌味なまでに透き通る石！

田園にて

当津宏昭

収穫を終えた水田に

シラサギが一羽降りてきた

悠々と歩き回っては地を啄み

翼あるものの自由を謳う

真っ直ぐに伸びるあぜ道を

人間が一人歩いてくる

黒い背景に浮く白い鳥に目をやって

翼なきものは立ち止まる

どこから来たのか

どこへ行くのか

人間の問いに鳥は答えぬ

飛び立つシラサギを見送って

果てしなく続く田園に

人間はただ取り残される

朝帰りのシャワー室

戸張雅登

始発で帰宅 髪についたタバコの臭いと
こみ上げてくる酒と胃液の臭い めまい
化粧を落として 服を脱ぎ 扉を開ける
もう彼には会わないと 弱い誓いを立てながら

蛇口を捻って 外の明かりと寒さに抵抗する
降り注ぐ優しい水滴 疲れきった体を腕で抱く
水が口を伝って流れ落ちて 腕と胸のあいだに
できた浅い池 桜色にうつすら染まった水は

腹の底で芽生えた証か わたしは腕を降ろして
淀みを流す 赤い印のついた水栓を回しても
変わらない水温 生温かさが部屋を満たす

一斤染の壁は 水と光を浴びて成長し
タイルは盛り上がり 黒いシミが広がる
部屋の鼓動は水を伝って わたしに帰る

グレープフルーツの木

戸張雅登

幼い僕が食べたグレープフルーツ
残った種は父によつて庭に蒔かれ
二階の高さに成長した

家の南西に生えるその木は
毎年 雪が降る頃に
籠を溢れさすほどの
黄金を実らせ 家族を喜ばす

お風呂に入れて 香りを楽しむ
砂糖に漬けて 味を楽しむ
親戚にも幸福をお裾わけ

けれど今年の太陽は照り続け
逃げることのできない実
毎日焼かれてわずかに焦げた

それから僕は見た 東北に置かれた
観葉植物の上 護符に祈る父の姿を

都会の月

戸張雅登

都会は明かりがうるさくて
誰もあなたに気をとめない
暖色に光る東京タワーは
そこからでも見えるだろうか

眠らない街は悪食で
明かりのために燃やす油は
いのちよりも重いらしいと
轢かれた狸の母が嘆く

空に浮かんだ銀の瞳は
人工の白い光に遠ざけられて
腹をすかせた少年たちは
コンビニ前でたむろする

あなたを頼る虫たちは
今夜も道を誤るだろう

手押し車

渡辺信二

秋深き告別ののち お焚き上げのため
手押し車が 寺へと運ぶ
この30年大切だった夢
絹布団—— くすんだ花柄 愛撫

鶴と亀 かつては その刺繍に
顔を埋めて 匂いをかいだろう
誰が そこに今
ひとの姿を見るだろう

「和尚さん 何処に置きましたよか」
「そこら辺でええでしょ」
「ここら辺ですか 枯れた切り花ばかり」
「ええ すぐ片づけましょ」

燃える 霞む 風 空に聞く
また 風 叫び 空開く

巫女が嫌いです

渡辺信二

おれの七五三のとき 赤白の袴姿が現れて

「おまえは 水と土にまみれて
死ぬだろう」と告げる

—— あれ以来 巫女が嫌いです

巫女とは 口寄せ 神に取入り

神にせせられ 神連れ 各地をさまよう——

正月ともなれば 神はばかりのまえで

あられ踊りの荒稼ぎ

高ぶりたもう神たかぶらかす

「あなたが命／あなたの命」

今では蝶々さんみたいに 英語もできて

「新しい親善大使」とニッポンの人気者——

今も密かに泥人形に おまえ 呪いを掛けるのか
ほんとに おれ 水と土にまみれて死ぬんだろうか

禁断の風

渡辺信二

科学的定義によれば 風とは 気圧の差で生じ
気圧は 太陽エネルギーの偏在で生じる――

それがヒトの知恵です でも むかし ぼくらは
ただ 野原に寝転がって 雲と風の戯れを

飽きずに眺めていた あの頃 放射能を知らず
ぼんやり問うたのは これが

「大きな巡り会い」なのかということ――

実は 恋だった 空が美しかった

今や パウンドの予言が実現している
既に空が癌に侵されていると

80年前に見抜かれた眼に見えぬ物質が
風となり 地上を襲う

ヒトの知 太陽を知らず智になれず
自然とひとの戯れを 恋を ついに禁じる

詩誌『立彩』
創刊に際して

我々は詩作によって人間の本质を表現する。同時に、詩の美しさを追求する。そのために、自分の身体を含めた現実への冷徹な観察をもとに、内なる叫びを言語化する。このとき、批評的視座をもつて現実を見つめることで、詩は、苦しい現実からの逃避先としてではなく、人間を見つめなおす場となる。

社会や自らに対する懷疑と怒りが詩作欲求として存在しているのであれば、人間再考の先に、よりよき生を見出すだろう。あるいは、宗教規範が絶対的ではなくなった近代以降において、人間を探究する詩は、人々の拠り所となるだろう。

詩とは、祈りである。祈りは、美しい。そして、美しさは、魂を清める。ゆえに我々は、美しさを追求する詩によって、人間の本质を表現することをここに誓う。

2012年4月

詩誌 立彩 第1号 2012年4月20日 頒価 800円

編集発行所 「立彩」

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 立教大学 6号館 6422 研究室 気付

印刷 第一資料印刷株式会社 TEL 03-5227-1728